

赦されて生きる（マタイによる福音書18章21～35節）170924 弓町本郷教会

以前、20数億円のお金を返して、お詫びをしたという人がいたということをお聞きしました。

あるお弁当屋さんが、お母さんの遺産をごまかして10億8千万円の脱税をしたということでした。相続税法違反の罪に問われたこの人は、修正して支払うべきお金、23億円を、自分の財産を処分してすべて支払ったということです。巨額の脱税事件では実刑判決が出て、刑務所にはいるのが当然なのだそうですが、この人のいさぎよさに、裁判官も非常に感動しました。「巨額脱税事件で執行猶予判決を出すのは勇気があるが、裁判官も時には、被告人の生き方にほれることがある」と述べ、さらに、この人に向かって、これからの人生、あなたならやり遂げられると励ましたということでした。

自分の罪を認め、誠実に償おうとするところから、新しい生き方が開かれてくることを教えられます。

主の祈りに祈られる祈り。「我らに罪を犯す者を、我らが許すごとく、我らの罪をも許したまえ」。自分自身が赦されたものであることを思うとき、他者に対しても、広い心を持って接して行けるのではないかと思います。しかし、自らが赦されたことも、自分の思い通りになった、これからも自分の思い通りにやっていける、としか考えられないとき、自分に甘く、人に厳しく、非常に狭い心で生きていくことになってしまいます。

イエスが語られたたとえ話では、ある王様の家来が王様に1万タラントンの借りがあったということでした。1万タラントンは、ざっと計算して3千億円という額になります。

家来は、借金を全部返しますから待ってくださいと頼みました。そして、王様は彼を憐れに思って、その借金を許してやったのでした。そのとき、彼はどう思ったのでしょうか。腹の中で、しめしめ、思い通りになった、とでも考えていたのでしょうか。この家来は、心を入れ替えるということにはなかったのです。

彼は、1万タラントンの、3千億円という、とてつもない借金を許されておりながら、自分が友人に貸した借金、100デナリオン、これは50万円くらいと思われませんが、それは決して許そうともしませんでした。それは、彼が負債を許されたことを心から喜

ぶものではなかったからではないかと思えます。

1万タラントン、3千億円の負債を許されたということ、それは、私たちが、神様から、まったく返すことのできない負い目を許されているということです。

100デナリオン、50万円の貸しが許せなかったということは、3千億円に比べればわずかなものだから許してやるべきであったのでしょうか。いや、返せそうな額だから返してもらってよかったということでしょうか。そういう問題ではありません。小さなことであっても、大きなことであっても、人を許せるか、許せないか、ということなのだと思えます。

許されたことを誠実に受けとめるところから、人を許す生き方が生まれるということ。人を許すことのできないものは、自分自身が許された実感のないものである。そう教えられるのではないかと思えます。

教会に行くのは気が重い。身におぼえもないのに、罪人だ、罪人だと、罪人呼ばわりをされる。別に悪いこともしていないのに、罪を許される必要もないではないか。心の中でそう思っておられる方は、実は、多いのではないかと思えます。

そうなってくると、教会の中であっても、裁き合いが始まります。気に入らない人のことは受け入れられない、ということになってきます。

しかし、このたとえ話を通して、イエス・キリストは、私たちすべての者が、神様から赦しの恵みを与えられたものであることをおぼえて、私たちがお互いに許し合う生き方に向かって進むように、はっきりと方向付けを与えておられるのです。

岡山県に高梁教会という教会があります。1879年、明治12年に高梁市でキリスト教の伝道が始められました。翌年、同志社の創立者新島襄が高梁を訪れたことで、伝道は急速に広がり、1882年に教会が創立されました。私たちの教会より4年前のことです。

高梁教会に連なる人たちは、教育や医療の働きでも地域に大きな貢献をしたのですが、その一方で、たいへんな迫害を受けました。教会の中に石が投げ込まれるということもあったということです。その石は「迫害石」と名前を付けられて、今も教会に保存されているそうです。

高梁教会だけではなく、多くの教会でこのようなことがあったことを思われます。私たちの先達たちは、人々の無理解、中傷、迫害にさらされながらも、暴力に対して暴力で応えるのではなく、地道な伝道、宣教の業で応えていったのでした。

「われらに罪を犯すものをわれらが赦すごとく、われらの罪をも赦したまえ」。この祈りをそのままに生きた先達たちの歩み。まず私たちが赦されて生きるものであるという、神様から与えられた喜びに感謝し、困難に耐えながら歩んだ多くの先達があったことを覚えたいと思います。

2001年9月11日、アメリカで起こった同時多発テロ事件は忘れることのできない出来事です。3025人もの方が亡くなった悲惨な出来事です。そして、それに続いてアフガニスタンでの戦争、イラク戦争と、次々と戦争が起こり、さらなる悲劇が繰り返されたことでした。

この事件で、お姉さんを亡くされたクリスティナ・オルセンさんという方がおられます。お姉さんはロサンゼルスに住んでおられたのですが、お母さんの引っ越しの手伝いのために、9月11日の直前にニューヨークに来ておられたのでした。

お姉さんは事件の前に、どういうわけか、家族とじっくり語り合う時を持たれました。宇宙が無限であること、宇宙に人間以外の生き物が存在するかということなどを話しておりました。また、戦争と平和の話をして、「私は戦争は間違っているとおもう。殺したり殺されたりするために若者を送り出すことは間違っていると思う」と話していたそうです。

お姉さんは、決して人の悪口を言う人ではありませんでした。家族を何よりも大切にしていました。医療事務の働きをしてたくさんの人から信頼されていました。このお姉さんに対する思いを、オルセンさんは詩に書いておられます。

わが姉は生涯の友／わたしたちには共通の過去がある

わたしたちの子ども時代の夢の織りなし／その糸はいつまでも続く

(中略)

クリスマス時にはバックルズ・スイート（ノルウェー産のクッキーだそうです）

そして春にはプラムの花

これらの思い出がわたしたちを導いていく／暗黒のときに慰めをあたえるために

わが姉は生涯の友／わたしたちには共通の過去がある

わたしたちの子ども時代の夢の織りなし／愛の夢はいつまでも続く

クリスティナ・オルセンさんは看護師として働いていたのですが、お姉さんが亡くなってから、働くことができなくなりました。しかし、やがてその深い悲しみを、家族の慰め、友人たちの愛で支えられていったのです。

歌を歌われるオルセンさんは、愛すること、理解しあうこと、平和を求めること、そのメッセージを世界に伝えて、自分自身の心と共に他の人々の心にも癒しと平安を求めていかれました。

しかし、この事件をきっかけにしてアフガニスタンで戦争が始まった時、さらに深い悲しみと大切なものを失っていく思いにとらわれたのです。それは、多くの人々が、自分と同じ苦しみを経験するのだという思いでした。お姉さんの死がさらに大きな暴力を正当化するために用いられるという思いでした。その思いから、オルセンさんは自分は歌わなければならないと感じられたということです。

『われらの悲しみを平和への一歩に』

クリスティナ・オルセンさんが参加しておられるピースフル・トゥモロウズというグループがあります。同時多発テロ事件で家族を失った100以上の家族が作っているものです。彼らは報復や戦争ではなく、平和的な解決を求めておられる方々です。

私は、イエスのたとえ話の中で、家来が許された借金がタラントンという額であったということから考えさせられます。タラントンというのは、とてつもなく大きな金額であるだけでなく、タレント、才能、賜物という言葉につながる言葉です。

私たちすべての者が、神様からそれぞれのタラント、才能、賜物を与えられて、この世の命、人生を歩むようにと送り出されています。その賜物の大小、強いか弱いかを人と比較してもしかたはありません。神様は、それぞれにふさわしく賜物を与えてくださっているのです。

それぞれの賜物を与えられた私たちは、これを用いて、神様の恵みに感謝する働きに進むようにと招かれています。しかし、私たちは多くの場合、自分の力、自分の知恵を、自分で手に入れた当然のものであるかのように考え、自分の思いのままに生きてしまいます。それはすなわち、神様の恵みを無視してしまうことです。ここに、聖書が示す人間の罪があります。

そして、その生き方からは、互いに許し合うことではなく、互いに裁き合い、責め合い、傷つけ合うことが生まれてきます。人のことが許せない、受け入れられない、邪魔者のように思う、あんな人いなければいいのと思う、そのような思いに、人が犯すすべての罪の根があるように思います。

この世の中の人間苦を見る時に、センチメンタリズムとは質のちがう、本当の涙が

出てきます。そうしてそれはまた本当の人間楽を知るものの避くべからざる人間苦です。そうしてこの苦とこの涙は、人間の進歩になくってはならない力また手引きです。

『愛と自由の言葉』

自由学園を創立した教育者、羽仁もと子さんの言葉です。羽仁もと子さんは、人間は何のために生きているのかとつぶやきたくなるような時、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」という聖書の言葉を示されるということです。どんなに小さなものも生きている、何も恐れることはない、そう考えると、生きるということはおもしろいことなのだ、私たちは「おもしろいから生きている」のだと、答えを与えられたのでした。

このように楽観的な見方をもって人間を見つめる時、苦しみを避けることはできないかもしれませんが、それを受け止めることができるのでした。苦しいことはいやだといって、楽しいことばかり求めても、決しておもしろいことがやってくるのではない。神様を信じて、あらゆる苦難を戦い抜く時、そこに楽しさ、満ち足りた思い、そしておもしろい人生が出てくるといわれるのです。

私たちに与えられたタラントの恵みを、当然のもののように思い、許し合うことのできない生き方に進んでしまう、そういう私たちに、なおも赦しの恵みが与えられて、この世に送り出されているのです。一日一日、私たちは許され、新しい命へと招かれているのです。

私たちをこの恵へと招くために、主イエス・キリストの十字架という大きな代償が払われたこと、主イエス・キリストの死を通して、私たちが新しく生きることへと招かれていることをおぼえ、新しいひとめぐりの歩みをすすめてまいりたいと願います。